

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：12401
 研究種目：研究活動スタート支援
 研究期間：2010～2011
 課題番号：22820067
 研究課題名（和文） 粘土帯土器文化を中心とした先史・古代の朝鮮半島における社会複雑化の研究
 研究課題名（英文） Research for social complication in prehistoric and ancient Korean peninsula
 研究代表者 中村 大介
 (Nakamura Daisuke)
 埼玉大学・教養学部・准教授
 研究者番号：40403480

研究成果の概要（和文）：本研究では、墓制や流通網といった視点から、朝鮮半島の青銅器時代から原三国時代までの社会構造の検討を行った。その結果、青銅器時代では概ねリネージ間の競合といった状況にとどまるのに対し、粘土帯土器文化段階では明確な階層構造をもつことが判明した。粘土帯土器文化は遼東地域から朝鮮半島に南下した文化であり、遼東地域でも古い段階から階層構造がみられる。つまり、粘土帯土器文化は階層構造を保持したまま南下し、朝鮮半島南部の社会を階層化させたと結論付けられた。

研究成果の概要（英文）：I examined the social structure in Korean peninsula from Korean Bronze Age to Proto Three Kingdom period through the view point of burial system and trade network. As a result, it was found that the society in Korean Bronze Age was limited to trans-egalitarian society which some lineages compete in regional societies, while pottery with clay band-rim culture (PCB culture) had a clear stratified structure. PCB culture moved south from Liaodong area to Korean peninsula, and it had the stratified society at the old stage of Liaodong area. That is to say, it was concluded that PCB culture went south with keeping stratified structure, and stratify the societies in southern part of Korean Peninsula.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011年度	770,000	231,000	1,001,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,980,000	594,000	2,574,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：東北アジア・燕・社会の複雑化・粘土帯土器

1. 研究開始当初の背景

朝鮮半島では朴淳發（2001）、李盛周（1998・2007）、李熙濬（2000・2007）らによって、青銅器時代から三国時代までの国家形成モデルが欧米の理論も交えて提示されている。これらの研究では粘土帯土器文化が中

国東北地方から南下してきたことに留意しているものの、基本的には青銅器時代からの一系的な社会発展という視点で国家の形成と成熟が説明されてきた。

一方、細形銅剣などの粘土帯土器文化特有の青銅器研究は蓄積されているが（李清圭

1982、他)、社会構造を含めた体系的な研究はほぼない。日本列島でも粘土帯土器が出土するため、移住などの問題が議論されているが(片岡宏二1999、他)、粘土帯土器文化の社会自体は研究されていない。また、粘土帯土器文化が遼東地域でどのように出現し、形成されてきたのか、当初の社会構造はどのようなものであったのかという検討もほぼない状況である。

以上のように、粘土帯土器文化に関連する研究は多いものの、歴史的、文化的革新性を認知した研究は現状では少なく、社会経済的観点から農耕が開始した青銅器時代の画期ほどは重要視されていない。しかし、青銅器を含む文化的内容からみて、粘土帯土器文化が朝鮮半島の国家形成に連続する要素をもつため、単なる社会発展としてとしてこの文化をとらえるのみでは理解が不十分である。

また、粘土帯土器文化及びそれを基盤として展開した原三国時代の社会では、周辺の文化や国家との折衝があったことが確認されている。文化競合などの視点からも、この文化をとらえなおす必要が生じている。

2. 研究の目的

(1)本研究では上記の研究動向を受け、①階層化、②居住の安定、③流通の発達という3つの観点から社会の複雑化をとらえ、粘土帯土器文化の内実を明らかにする。

(2)朝鮮半島における粘土帯土器文化と松菊里文化の関係を明らかにする。特に、階層構造の比較と通じて、これまでの研究で理解されてきた一系的な社会発展についての是非を検討する。

(3)粘土帯土器文化に後続する原三国時代の社会について、燕、漢、倭との競合による社会の複雑化過程を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)墓制や流通を含む多角的な視点から粘土帯土器文化の形成と展開、朝鮮半島の青銅器時代文化との比較を行う

(2)原三国時代に併行する楽浪郡、弁・辰韓、倭について、鉄製武器の型式と数量から、当時の国際関係を検討する。

4. 研究成果

(1)本研究を行うにあたり、遼東地域を含めた粘土帯土器文化の編年を土器の型式変化を基準に行った。その結果、粘土帯土器文化が四時期(粘土帯土器文化Ⅰ～Ⅳ)、粘土帯土器が残存する段階の原三国時代が二時期(早期・前期)に区分された。

また、現在、青銅器時代後期後半の松菊里文化と粘土帯土器が重複することが知られている。しかし、どのぐらいの期間重複しているかは研究者ごとに差異がある。今回の検討の結果、少なくとも粘土帯土器文化Ⅱ期(紀元前4世紀)、可能性としてはⅢ期(紀元前3世紀)まで重複することが判明した。従って、最大限にみつみると、粘土帯土器文化が南下した紀元前6～5世紀から紀元前3世紀までの300年間ほど、在地の青銅器時代文化と併存することが判明した。

(2)粘土帯土器の土器副葬を中心とした葬送儀礼を検討した結果、Ⅲ期後半から朝鮮半島西南部で新たな副葬方法が出現することが明らかになった。また、粘土帯土器文化Ⅳ期以降、西南部では粘土帯土器文化の遺跡が激減するが、原三国時代には東南部で遺跡が急増し、新たな副葬方法もこの地域で継承されることがわかった。

原三国時代以降、楽浪郡の設置により朝鮮半島では漢と関連した文物が増加するが、葬送儀礼は粘土帯土器文化から継承したものを保持ことが判明した。従って、この点からも原三国時代の文化が粘土帯土器文化から継承されたものであることが指摘された。

(3)集落については、朝鮮半島南部に入ると、粘土帯土器文化も在地の松菊里文化と同様に主として丘陵に形成される。今回の検討では一集落に100～200年間ほど居住する事例がわかり、移動を繰り返すだけの短期的な居住ではないことが理解された。

また、これまで粘土帯土器文化に伴うものという観点からはあまり重視されてこなかったが、青銅器の文様に大型の踏鋤が鋳出され、日本列島でもこの時期から大型の踏鋤が出現することから、生産面での安定ももたらされた可能性が指摘された。

(3)遼西地域の夏家店上層文化から朝鮮半島の松菊里文化、粘土帯土器文化を副葬品と埋葬施設の規模から検討し、社会構造を比較した。前述した編年観を考慮すると、松菊里文化で階層化した可能性のある地域は粘土帯土器文化の影響を受けたためと理解された。

さらに、遼西地域から朝鮮半島においては、遼東地域を経由して、夏家店上層文化から粘土帯土器文化まで共通した階層構造があることを指摘した。遼寧式銅剣などの文物の共通性と、時期的な新旧も勘案すると、夏家店上層文化から粘土帯土器文化にいくつかの文化を経由し、階層構造も含めた総体的な影響があったことが推定された(図1)。

(4)朝鮮半島では碧玉製管玉が青銅器時代から粘土帯土器文化Ⅲ期まで多数流通する。こ

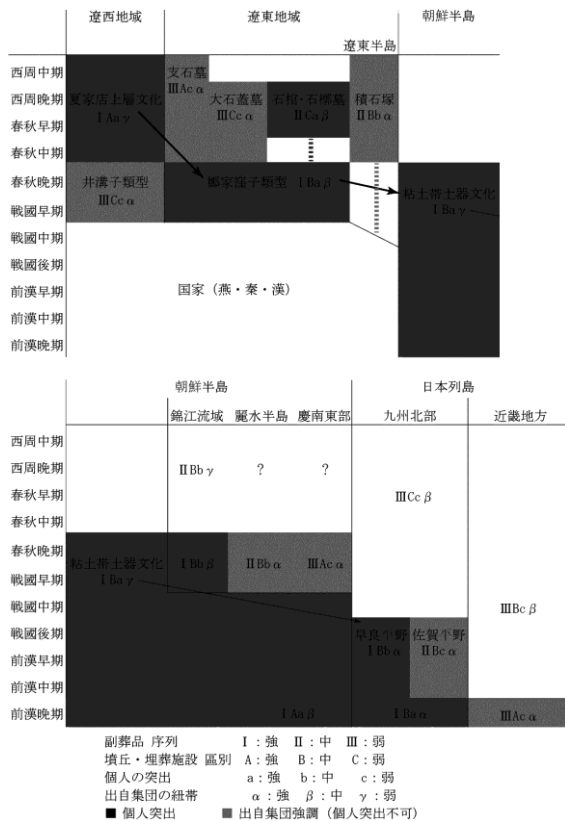


図1 東北アジアにおける階層化社会の出現と相互関係

これらの資料に対し、研究協力者とともに蛍光X線分析を行い、分析した結果、朝鮮半島南端部を起点として、南部全体に広く碧玉が流通することが判明した。

さらに、粘土帯土器文化が南下する段階には、朝鮮半島中西部で新たな碧玉産地が開拓され、松菊里文化と粘土帯土器文化で交換される。この点から、前述した松菊里文化における階層構造の進展が、粘土帯土器文化の影響であることがより補強されたといえる。同時に安定した交易を支える居住基盤が両者にあったこともわかった。

(5) 原三国時代には朝鮮半島東南部の弁・辰韓が粘土帯土器文化を継承するが、楽浪郡からの影響も受け始める。しかし、鉄製武器に着目すると、漢と楽浪郡の上位層がもつ長茎鉄剣は弁・辰韓には現れず、倭(北部九州)の政体にのみそれらが現れる(図2)。

近年の調査では、当時、辰韓で鉄鉱石が産出することが確認されており、『三国志』にはこれを楽浪郡に供給していたことが記載されている。従って、漢は、地理的に楽浪郡に近い弁・辰韓が突出し過ぎないように、海を挟んで対峙する倭に漢の鉄製武器を配布し、これらの地域の均衡を保とうとしたと推定される。紀元前1世紀頃には、漢による外交管理を中心としつつも、朝鮮半島から日本列島で複数の政体が競合する状況になったとことが判明したといえる。



図2 楽浪郡、弁・辰韓、倭の鉄剣(紀元前1世紀)

(6) 上記の検討によって、粘土帯土器文化が遼西地域の夏家店上層文化の北方青銅器を継承し、さらに階層構造も共通させていたことが明らかになった。さらにこれが朝鮮半島南部に、故地の階層構造を保ったまま至る。そして、玉類などの交易を通じて、朝鮮半島中西部在来の青銅器時代文化(松菊里文化)に影響を与えたことがわかった。

最終的には、松菊里文化の文物は放棄され、粘土帯土器文化のみが展開し、原三国時代につながることから、朝鮮半島では、国家形成に連続する社会構造は、粘土帯土器文化を基盤としていることが明らかになったといえる。つまり、文化交代に近い内容であり、朝鮮半島の階層構造の展開は、一系的ではなく、外来からもたらされたものが重要であることが判明した。

さらに、粘土帯土器文化を基盤とした原三国時代の社会は、朝鮮半島に形成された楽浪郡、当時、成長してきた倭(北部九州)と競合し、漢の外交によって、地域の平準化が図られたことがわかった。

朝鮮半島では、粘土帯土器文化が入る段階から、南部の政体との競合関係が生まれ、展開する段階には、中国の政体、倭の政体といった外部との競合が生じる。従って、朝鮮半島においては、政体間の競合が社会の複雑化に重要な役割を与えたといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 中村大介、東北アジア青銅器・初期鉄器時代の首長墓副葬品の展開、韓国上古史学報、査読有、75号、2012、79-112
- ② 中村大介、粘土帯土器文化と弥生文化、季

- 刊考古学、査読無、113号、2010、43-47
- ③孫峻鎬・中村大介・百原新、レプリカ法を利用した青銅器時代の土器圧痕分析、野外考古学、査読有、8号、2010、5-34
- ④中村大介、粘土帯土器文化期から原三国時代の社会と副葬習俗の変化、考古学研究、査読有、第57巻第1号、2010、14-34

[学会発表] (計6件)

- ①中村大介、楽浪郡成立前後の国際関係、交響する古代II (明治大学シンポジウム)、2012.3.6、明治大学 (東京)
- ②中村大介、東北アジア首長墓の副葬品と歴史的展開、東北アジア青銅器文化と支石墓シンポジウム、2011.11.23、韓国学中央研究院 (韓国)
- ③中村大介、中国東北地方の鋳型と源流、東北アジア考古学研究会、2011.11.18、東京大学 (東京)
- ④藁科哲男・金奎虎・中村大介、先史・歴史時代における韓半島の玉類の産地同定と日韓交易の復元、東アジア文化遺産保存学会第2回大会、2011.8.18、内蒙古博物院 (中国)
- ⑤中村大介、中国東北地方における青銅器時代の鋳型、草原考古学研究会、2011.7.10、ユーラシア文化館 (横浜)
- ⑥中村大介・藁科哲男、朝鮮半島における玉類の産地同定と流通の復元、保存科学集會 2010・古代の玉、2011.2.5、奈良文化財研究所 (奈良)

[図書] (計1件)

- ①中村大介、弥生文化形成と東アジア社会、塙書房、2012、583

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等 無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村大介 (NAKAMURA DAISUKE)
埼玉大学・教養学部・准教授
研究者番号：40403480

(2) 研究分担者

無し
研究者番号：

(3) 連携研究者

無し
研究者番号：

(4) 研究協力者

藁科哲男 (WARASHINA TETSUO)
遺物材料研究所・所長
研究者番号：無し
金奎虎 (KIM GYUHO)
国立公州大学校 (韓国)・自然科学大学 (学部)・教授
研究者番号：無し